
逃走あるいは溶解する境界

——笙野頼子「なにもしていない」をめぐる——

疋田 雅昭

笙野頼子『なにもしていない』は、一九九一年九月に刊行された笙野頼子初めての小説集である。表題作である「なにもしていない」は『群像』五月号に掲載された。年譜の記載事項では、この年の三月に小平市に転居し「小説の原稿料だけで自活できるようになる」という記載¹⁾がある。

従来、この「接触性湿疹」は外界との関係断絶との²⁾、「天皇」は「ナニモシテナイ」存在とのメタファー³⁾として解釈されてきた。また「場所もなかった」との比較では、様々な「ない」を強制してくる社会へのカウンターとしての読み方⁴⁾や、「幻の闘争」を続ける笙野自身の姿を描いているという指摘⁵⁾がなされて来た。

〈生きている限り、どこかに住まなくてはならないという類の理性は保たれたままで、〈略〉幻への闘争とたえまなく戦っていた〉という一節があるが、これは、〈私〉が〈現実〉の外へ逃避する安易な道を捨て、〈現実〉の不確かさの中に身を置きつづける困難な道を選択していることを示している。

「なにもしていない」— 〈現実〉の不確かさの感覚—⁵⁾

作家論的なテーマのレベルで考えれば、笙野の「選択」は「移動」を伴う「逃避」というよりは確固たる「抵抗」である。だが、物語内容のレベルでは、多くの笙野テキストにおいて「移動」する主体が描かれているのにもかかわらず、その「移動」が「円環構造」をなしていることがこの側面をわかりにくくしている。

しかしながら、笙野のテキストを「移動」という面から考えてみることには、やはり重要な意味があると思われるのだ。「なにもしていない」の場合、語り手の「移動」とともに、天皇家の「移動」が描かれる。使い古された比喩ではあるが、この物語の「闘争」はそれらの「移動」=「逃走」によってなされている面がある。

そして、笙野のテキストにおいてもう一つ重要な面は、中川成美によって「断片化」と指摘されている点だ。

まず、笙野作品で特徴的なものの一つに、断片、断片化ということがある。これは、固定的であるために総体としてしか考えられないもの、それがばらばらに

なったとしたらもはやその事物の性質を逸脱して実体からは、遠く離れてしまうようなものを、突然細分化するということである。

「SF 的想像力と文学—笹野頼子の冒険—⁶⁾」

確かに、「なにもしてない」も「断片化」に満ちたテキストである。だが、中川も指摘するように、「断片化」の単純な指摘は、「複数主体への希求」とか「主体の揺れ」といった「クリシェ」に陥る危険性がある。

断片「化」は、当然ながら、統合から断片の方への移行を伴ったベクトルを有している。その視点は、なぜ断片「化」したのかという「原因」の希求に繋がりがやすい。だが、読者にとっての「断片」であることの気付きが、実は事後的な「出来事」に過ぎなかったとしたらどうだろうか。

ダダイズムなどの前衛芸術評価に顕著な傾向として、「断片」であるという指摘は、指摘と同時に結果であるという側面がある。断片であると指摘することは、その間にある(かもしれない)関係性に対する思考停止を伴ってしまうのではないか。元来無関係なものが提示されている状態を我々は「断片」とは見做さない。あるいは、そういうものに「断片」としての価値を見出さない。むしろ、我々がテキストにおいて了解しやすい「断片」とは、それらが「統合」されていた「記憶」を当初から含有したものののではないか。

本論が注目したいのは、「断片化」されているはずのものたちが持っている不思議な結びつきの方である。「移動」と饒舌な「妄想」というテキスト内の運動＝力学が、一見「断片」に見えるものや二項対立的に見える諸要素を結びつけてゆく様相である。

1 「現実」との闘争 あるいは「現実」からの逃走

破傷風でもなければ凍傷でもない。ただの接触性湿疹をこじらせた挙句、部屋から出られなくなり妖精を見た。天皇即位式の前後だった。私の部屋は、八王子の旧バイパスに面している。 (下線は引用者、以下同様)

さて、この「即位式の前後」とは具体的にはいつのことなのだろうか。昭和六四(一九八九)年一月七日に天皇が崩御し、昭和天皇と追号。同日に皇太子明仁が踐祚し、平成と改元された。宮殿松の間で「剣璽等承継の儀」が行われ、いわゆる三種の神器が受け継がれる。その二日後の九日には、三権の長らと初めて会う「朝見の儀」が行われる。この儀式において、国民に向けて即位が宣言されたわけだが、後の展開から考えてもこの小説の「即位式」が、これらの行事を指している可能性は低い。

実際、昭和天皇の大喪は二月二四日に新宿御苑で行われたわけで、国民の印象としてはこの年はむしろ昭和天皇への喪の期間であった。このムードを一新する出来事として注目されたのは、礼宮文仁と川嶋紀子との結婚報道であった。九月一二日にいわゆる「内定」会見が行われている。

昭和天皇の喪があけた平成二(一九九〇)年六月二九日に結婚、秋篠宮家を創立す

る。そして、同年十一月一二日には即位礼正殿の儀が行われたのである。これを「即位式」としてみれば、この式当日は月曜日。前日からは連休となる。そして、勤労感謝の日にあたる二三日が金曜日のためここからを三連休と考えることも出来る。要するに、一九九〇年十一月頃から発症し、九日の金曜日に至ってしまったので、少なくとも一三日火曜日まで我慢するしかないという状況であったと、同時代的には読まれていたはずだ。

式の二日程前から夜は静かで、窓越しに見れば、まばらな車は、ライトを落として走っているようなおとなしさだった。連休は帰省や旅行が多く都内の人口が減っていたはずで、その影響や、警備の様子を確かめに、私は外へ行きたくてならなかった。

「式の二日程前」は一〇日の土曜日。さらにそこから「十日程前」なので、十一月に入ってから連休までのおよそ一〇日間を無駄に費やしたことになる。ここで「即位式」に対して「八王子旧バイパス」周辺が警戒地域にあっているのは、昭和天皇が埋葬される武蔵野陵墓地が、高尾駅から一・五キロほど北上したあたり、国道二十号線と中央高速道路の間に位置しているからである。このバイパスは、宇都木町に至るまでの国道十六号線のそれに当たるので、まさに重要な警戒地域だったのである。

救急病院の所在地は判っていた。ただ皮膚科の病くらいでという偏見があり、わざわざそこへ行くという発想はなかった。マンションのオーナーも同じ敷地内におり、普通の女子学生会館などよりはるかに面倒見は良かった。だがそのオーナーのところにはいちいち行き、クスリハアリマセンカと発音するのさえ、億劫であった。億劫というより、極端な鬱になってしまっていた。

「女子学生会館」という比較対象から語り手のおよその世代と学歴が見えてくる。自己を客観視するその視線には、精神分析などの知見が含まれており、かなりの高等教育を経ていると考えてよいだろう。

ここで鬱である自分を客観視出来る自分を有していることは、鬱の症状としては決して珍しいことではない。だが、この語り手の場合、その判断する主体自体が常に分裂の中にあることが特徴的である。

なんだか症状が「架空」になってくる。たえまなく痛く、奥歯や肋骨にまで痛みの移ってくる、手の皮膚の軋みがまず幻覚じみて来るし、じくじくして止まらない血液のにじみも、汗の一種としか思えなくなる。要するに痛みよりも外に出て口をきく事が怖かったらしい。

痛みとは自分にとっては「直接的」なものである。だから、ここで疑われているのも痛みの存在自体ではない。他者との会話を忌避する気持ちが己の痛みを事後構築的

なものとなさそうとした結果こそが「架空」と呼ばれる意識なのだ。まるで現象学的還元を直接的あるいは絶対的な感覚に支配されることを避けるための「手段」として利用しているようだ。

今までの人生三十余年の半分以上を占めた学生生活にしても、軽度のいじめと、登校拒否にすらなれぬ半端な欠席、それに受験ノイローゼなどに終始していた。しかもそれらがその程度で済んだのは逃避する事を知っていたからで、現実はいつも悪夢だった。同時にその悪夢のような現実から、外れるぎりぎりの場所に来た時、私は現の感覚を取り戻せた。

周囲の現実から「逃避」するために現実の方を「悪夢」とする意識。小説を書くという職業選択の理由もそこにあった。ワープロ(Windows95以前のこの頃にコンピューターで書くことは一般的ではなかった)を打っている間は「幸福で夢中」であったという語り手の意識は典型的な「引きこもり」のそれであったと言えるかもしれないが、一方で「朝起きて自分が誰で何をしているのかに気付くとまず吐きそうになった」という意識は、自己も含めた全ての現実を否定している点において徹底的である。

子供の頃から続いていた外界との軋轢は今では真っ白な厚い壁と化した。閉じ籠もりは常態になり私はそれに慣れた。曲がりなりに持っていた社会性までも退化させた今、深海の底魚のような感覚になった。同窓会は私の存在などもう忘れていた筈だ。無論私自身がそう仕向けて、漸く安心したという次第なのだが。

周囲の「白い壁」に象徴される「狭いワンルーム」という空間は、人間関係を中心とする社会との対峙である。語り手の社会は文字通り壁の中の閉鎖空間によって断絶されている。こうした空間同士の境界に壁があるという想像力はある意味凡庸ではある。だが、境界を挟む二項対立という思考について、鈴木健は、『なめらかな社会とその敵』において、興味深い指摘をしている⁷⁾。

鈴木によれば、「なめらか」ではない「社会」とは「連続性の無い境界によって隔てられた社会」である。人間の細胞において、細胞核という「中枢」を細胞壁という壁」が包み込み、ここを「境界」として細胞の内部・外部が構築される様に、人間の皮膚、人間の領域、人間の領土(国家)と、これらの想像力は同様な比喻によって構築されている。

だが、こうした「境界」によって生じる、内部・外部自体が、この「境界」の意味を揺らがせるものであり、「境界」が二項対立を生むのではなく、二項対立の意識が「境界」がある世界を生み出している。にもかかわらず、その「境界」の内実は非常に茫漠たるものである。

私たちが皮膚の境界をもって一つの個体としてみなしがちなのは、皮膚の内側の細胞同士の相互作用の密度が、別の個体の細胞との相互作用に比べて大きいから

である。

ここで、人間の「範囲」を物理的あるいは即物的に考えた時、しばしば皮膚が「境界」として機能してくることに注目してみれば、この物語の語り手は、ある意味、非常に「近代」的な思考の中にあることがわかる。

人に反応を与えそこで何か異様な葛藤が起こったりすると、この狭いワンルームに確保した自分の空間、いや、正確にはもうそこから出られなくなっている閉鎖の世界に、世間の恐ろしい風が吹いてきて何もかもぶち壊しにしてしまうような気分になっていた。そんな中で現れた湿疹であった。

語り手を襲った病が皮膚病であることは、語り手自身の社会から隔絶された状態、いわゆる「ひきこもり」の状態の象徴である。そう考えると、部屋の物理的境界が「壁」に象徴され、住人の物理的境界線が「皮膚」に設定されていることは、ある葛藤の根源とならざるを得ない。

部屋の壁がある閉鎖空間の砦であるならば、皮膚病の治療のためにはその外部に出なくてはならないし、そしてその外出とは単なる壁の外側へという意味ではなく、「説明」などといった他者との社会的「接触」という行為を必要とする。そして、その行為とは、これまでの人生で極力避けてきたものそのものなのである。

また、皮膚には様々な二重性（二面性）があることもしばしば指摘される。ヘルマン・シュミッツは肉体の現象学についての著作の中で、知覚を「直接与えられて」いるものと「見て手で探って触知することによって」体験されるものに二分している⁸⁾。ここで「知覚」する身体の一部を「手」に象徴させているのは、内部発生的な感覚と外部由来の感覚を対応させ、「手」を外界と交渉する部位として考えているからだ。この感覚は、サルトルや清岡卓行のそれと近い⁹⁾。そういえば、語り手の職業もワープロに「手」で打ち込むことによって仕事をする文筆家であった。

ところで、この内部発生的な感覚の中で非常に顕著なのが違和や痛みの感覚であることは理解しやすい。また、身体論的な議論では、通常透明化している身体が意識されるのは、痛みなどが生じた時であるという指摘もしばしばなされる。

さらに、C・ベンティーンは、二項対立的な近代的世界観によって、皮膚も自己の境界として強く意識されるようになる歴史において、内部を秘匿するという感覚が生まれ、その象徴としての皮膚をどう見せるか、どう隠すかという意識や文化が発生する過程を指摘している¹⁰⁾。

こうした議論の延長上に、このテキストをおいてみると、この物語では、ベンティーン¹⁰⁾の歴史的議論に収まりきれない多くの問題が指摘しうる。皮膚が醜く腫れ上がる病状は、自己が知覚する身体とそこから想像される他者が知覚する身体との間にある様々な問題が凝縮されていることに気がつく。だが、それは酷い病状の身体がどう見られるのかという視覚的問題のみならず、「なにもしてない」という言葉に象徴される自己のアイデンティティ・クライシスという認識論的な問題をも呼び込んでいる。

でたらめな感覚と試行錯誤以外に頼るものはなく、自分の体や心がまったく捉えられない状態、それは無論単なる遊びなのだが、同時にその遊びを信仰し始めていた。閉じ籠もりの中にも一応保っていた論理や常識まで、この信仰の前には危うかった。

さらに、痛みや幻想を合理的判断によって客観化しつつも、その中にあえて参入して戯れようとする分裂的思考は、自己批判を続けながらも、類似性や近似性といった言語的(記号的)連続性によって、次々に新たな思考(試行)に移動してゆき、その継続が結果的に自らのアイデンティティの探究になっている。

幻視・幻聴・痛みなどは直接的なそれとして現出するので、「本気で」向き合いつつも、それを対象化する感覚を同居させることは、本来非常に困難である。

霊という文化に刃物やお経という文化がよく効いたりするところが我ながらマヌケだとは思ったのだが、自分の知らない心の底の方で、コントロールの出来ない迷信がうごめいている状態には興味が湧いたのだった。外界に手が出ない分内面に行った。

こうした感覚的(絶対的)なもの存在を否定しないままそれと戯れつつも、戯れる自身をも客観視するような徹底的に「記号的な態度」は、自己の「夢解釈」や「ドッペルゲンガー」を目の前にしても同様である。

だが、なぜ自己の直接的に作用する与件に対してまで、こうした感覚を持ち続けようとするのか。

そんな想像に溺れている間、現実はずっと遠のいてくれたのであった。現象は現象に過ぎないのであって、深層心理だとか霊の通信だとか、理由を付ける事には何の興味もなかった。個々の「奇妙な」事例をいじって遊ぶ事とそれは、別の話だった。

記号的な世界への戯れは、あくまでも現実的な世界からの逃避としてしか意味を持ち得ない。そこにあるのは、「現実」と「現象」の間にある強固な境界線である。

空想の中では原始人にも中世の人間にもなる事が出来たし、自己暗示でもインチキでも、部屋の中ならそれらを繋げて架空世界も作れた。霊とも遊べた。無論信じてはいない。でも、「現実」よりは、好きだった。

語り手にとっての「現実」とは、結果として「現象」として考えることが出来なかったなかであった。長く放置した痛みは、一月ばかりの間に、語り手にとって記号的に相対化できない「現実」となってしまったのだ。

物語前半で冗長に展開される病状の説明は、こうした記号化の痕跡であると見てよいだろう。様々な病名の検討、克明な患部の描写、その細かい対処とその結末に至るまでの饒舌な語り。語り続けることだけが、「現実」に対峙する唯一の手段であるかのように……。これは明らかに終わることの無い「逃走」である。もちろん、逃走劇の唯一の幕引きが「現実」を変えることしかないことは、「語り手」にも自明なことではあった。

2 「ひきこもり」から考える あるいは 「ひきこもり」を考える

医者に行かない理由はどこからでも出てきた。例えば医者に行き、何をしているのか訊かれたら困るからだとか。だって正確に言えば、やはり私はナニモシテナイのだから答えに詰まるのだ。ナニモシテナイ私は医者に行くかわりに、自分の力で指を曲げてみるという工夫に熱中したりしてみたのだった。

語り手にとって病院に行くことは、社会とコミュニケーションをとることと直結している。さらにその意識は、ナニモシテナイという自覚を生じさせ、それが社会との断絶になるという悪循環から逃れられなかった。

病気の直接の原因は不明だが、きっかけは、直前の帰省、兆候は目の異常であった。物語の終盤に語り手は再び伊勢に帰省し、帰京した語り手は物語の最後に再び「ものもらい」を発症させており、物語は円環構造をなしている。

湿疹の症状は、両親の旅行の留守番とその後しばらくの家事代行をうけおった時期に発生したものだ。直接の原因が洗剤等からのアレルギーにあったのだとしても、それが可視化したものは湿疹という病状だけではなかったはずである。

この物語を「ひきこもり」をめぐるそれと捉える言説は少なくない。確かに、語り手の生活を一言で表現すれば「ひきこもり」という言葉はしっくり来る。だが、この語をめぐる歴史をふりかえればその歴史は意外と浅い。

「ひきこもり」を「人や社会との非接触」と「社会的自立の忌避」と定義すれば、随分昔から指摘出来る現象である。森田正馬の「対人恐怖」や丸井文男の「意欲減退型留年」、笠原嘉の「退却神経症」、あるいはエリクソンの「モラトリアム人間」など、多くの言葉により同様の現象が捉えられてきたとも言える¹¹⁾。

そうした中で、一九九〇年代までそれほど浸透した語とは言えなかった「ひきこもり」は、平成一一（一九九九）年の京都日野小学校男児殺人事件、翌年発覚した新潟県柏崎市女性監禁事件、同年の佐賀西鉄バスジャック事件などの事件が、一気に「ひきこもり」という語をともなって社会的関心の的となった。高山龍太郎の調査¹²⁾によれば、「ひきこもり」という語は平成二（一九九〇）年前後から使われ出すが、その対象は当初から「不登校」など学校をめぐる問題をめぐってのものであったと言う。平成元（一九八九）年の青年問題審議会の意見書「総合的な青少年の対策の実現をめざして」において行政の文章の中に「ひきこもり」という語が使われているが、そこでも「登校拒否」とともに使用されている。

「ひきこもり」という言葉が「ひきこもり」本人たちに浸透し始めたのは、一九九〇年代後半と思われる。二〇〇〇年初めの座談会で、一八歳から十五年間ひきこもった三三才の男性は、「だいたい『ひきこもり』という言葉はここ四～五年で発生した言葉でしょう？ 自分がひきこもっているときには、そんな言葉なかったですもんね」と発言し、自分が知ったのは「二～三年前かな」と答えている。

さらに、ここで問題になっているのは、単なる言葉の問題だけではない。この問題の歴史的経緯を四段階に分けて整理する高山は、その最終段階（一九九七～九九）において、ようやく「高齢化と長期化ゆえに不登校とは別種の問題性を帯びた現象」として「ひきこもり」が再定義されていったと指摘している。

こう考えてみると、このテキストは、「ひきこもり」が問題化され始めた時期に、その後の主要な議論を先取りするかの様な事態が描かれていると言える。にもかかわらず、このテキストが特殊なのは、その「ひきこもり」の主体が女性であることだ。もちろん、こうした判断にも一定の留保は必要である。

「ひきこもり」は男性に多い、しかも圧倒的に、と思われがちだ。たしかに、統計調査の多くはそう語っている。しかし、少し慎重に構えることも必要だろう。調査におけるサンプルの代表性が問題だからだ。（中略）就学している場合は、男女ともに「家から出ない」ことは問題視されやすい。しかし、就学という条件がなくなると、就労規範にはジェンダーによる相違があり、例えば「家事手伝い」「主婦」という表現によって女性の「ひきこもり」は問題化されにくい、というわけだ。

こうした指摘¹³⁾をした荻野達史によると、統計上の問題をひとまず横においておけば、この男女差には幾つかの仮説があるという。一つ目は、立身出世という社会的圧力が男性の方により強く作用とするというもの。二つ目は、性的な挫折は男女同様だとしても、社会的挫折に加えられる男性の方がより深刻であるというもの。三つ目は、リストカット等の自傷行為は女性の方が多きことなど、挫折に対する発現形態に性差があるというものだ。もちろん、これらの説の検討以前に、統計方法の問題から考えるべきなのは言うまでもないが、それにしても二つ目の「性的な挫折」説は、少し首をかしげざるを得ない。

実際、例えば塩倉裕は、自己実現が「恋愛」や「結婚」というものに内面化される傾向は女性の方が強く、よって性的挫折の重みは女性の方が大きいこと。さらに男性であれば、性的挫折を仕事による自己実現で補うことがより可能であることなどを指摘している¹⁴⁾。

このテキストにおいての「ナニモシテナイ」に、執筆という仕事で独り立ちして生きていくことが出来ないことが含まれていることは自明なことかもしれないが、そのこと自体を書くことが結果的に「ナニモシテナイ」訳ではなくなるという逆説性を含

んではいる。

ところが、その「ナニモシテナイ」には、「恋愛」や「結婚」という問題も当然含まれており、それは何かしらの形で相対化されることはなく、残滓の様にテキストに残り続ける。清水良典は、以下の様な指摘をしている¹⁵⁾。

このとき、天皇を中心とする家族の一群が日本の「象徴」として崇敬されている外部と、結婚も恋愛も就職もしないまま単身で暮らしつつける「ナニモシテナイ」「私」とは、天皇制への賛否というような論理においてではなく、存在の生理として烈しく対立している。

このテキストは、天皇や故郷という「装置」によって、この問題を直接的な主題（語り手の思想）としては巧みに回避しつつ、逆説的にはっきりと示すような構造を有している。こうした意味で、このテキストに当時の「ひきこもり」の実相が描かれているという、反映論的な見方には一定の留保が必要である。それは、社会学や教育学での「ひきこもり」へのアプローチを単に先取りしているという様なことではないし、他学問の言説からの影響といった問題でも、もちろんない。このテキストを読むことは、むしろ、文学的な言説が持つ可能性の問題、他ジャンルの言説への可能性の問題として考えるべき問題系なのである。

3 「テレビ」と「現場」あるいは「現実」と「虚構」

「夢」の方が「臨場感」があり「空気」が「密」であるという語り手にとって、現実の皇室やテレビというメディアはそれほど魅力的なものではなかった。にもかかわらず、語り手がテレビに惹き付けられているのは、皇室関係行事である。だが、元々「皇室信者」ではないという語り手自身にはその理由ははっきりしない。

だが、昭和天皇の崩御が一九八九年。その過程における様々な延命治療の様子は、日々国民に報道され、様々な行事の開催が自主規制されるなどいわゆる「自粛ブーム」がおきる。そして、崩御から新しい天皇が即位し元号も改まり、そして「お葬式の行列」、皇太子の結婚報道から婚約に至るまでの一連の出来事。これらの報道の中心は全てテレビにあったと言ってもいい。言うまでもなく、記者会見や大きな行事とったコンテンツは、圧倒的にテレビが有利であり、インターネットなどまだその存在すら知られていない時代であった。

「即位の礼」は、昭和三年以来、六二年ぶり。予算規模こそ、「昭和」の一六二四万円（一九八九年との差を勘案しておよそ二二〇億円）と「平成」の六九億円は大きな差であるが、その分テレビによる全国中継による視聴者の数は、「昭和」のパレードを直接見に来た一一〇万人を遙かに凌駕した。

警備面で比較してみると、「昭和」の時は、三・一五弾圧や治安維持法の改定（最高刑を死刑にした）もあった上で二万七〇〇〇人もの人数を動員したのだが、一方「平成」では三万七〇〇〇人の配備体制であったが、当日の同時多発的ゲリラ事件の発生件数

は三六件と決して少なくはなかった。テキストにある「警備」への言及は、こうした事態の反映なのである¹⁶⁾。

西側第二位の経済大国の威信を誇示しながらも、開かれた新しい皇室をアピールする、一五八の国と機関の代表が臨席した「即位の礼」と「大嘗祭」は、皇室の伝統に即して、大正天皇や昭和天皇の時のものを修復・修理したり、伝統的技術の衰退から多くの苦労を経て実現された。

さらにこの数年の間の皇室行事の多くは、多くの国民にとって一生で何度も経験出来るようなものではなく、その分、国民の関心は、細かい部分にまで寄せられており、こうした形式性への精緻な拘りが、テレビによるライブ中継映像とその解説によって後押される形になった。

見始めの時は、きっと長くて退屈だろうと自分でも思うのだが、結局最後まで見るはめになる。後からニュースでというのは気にいらなかった。現にしているところを同時進行で見、現実とその場にいるような錯覚を持ちたかった。

「どの行事も幻想と現実が交錯しているようでついつい見」てしまったという感覚と「気になるのはその全体の感触だけで具体的な方面にはむしろ違和感しかなかった」という感覚は一見矛盾しているが、ここには、テレビ中継の視聴者がもつ独特の感覚が描かれている。

細かい解説とともに、様々な調度品や礼服の拡大映像。テレビによる中継は、現場に居ずとも現場に居るような感覚をもたらすとともに、そこで経験される体験は、実際の現場では決して体験出来ないものである。

むろん、語り手はこの矛盾に自覚的だ。古式を強く意識したという様式をテレビは「源氏」を引き合いに出すことによって「翻訳」した。しかし、文字である「源氏」の世界を現前の映像に翻訳することの不可能性に思い至り、両者の隔絶をより認識する。そもそも、テレビを買ったきっかけも「現場」と「映像」の差に興味を持ったからだと言語する。

当然、こういう行事を観ている自分に「コクミン」という意識が生じることに自覚的である。記号的な世界構築に常に意識的であるから、そうした感覚を絶対視することはない。

もちろん、そうした「遊び」は常に「痛み」や「痒み」という直接的な与件によって相対化されてしまうが、この直接性に唯一拮抗出来るものも「遊び」という記号的世界の妄想以外にはないのだ。意識的な妄想は「コクミン」や「テンノー」すらも相対化出来るだろう。それでも、意識に直接与えられる与件が相対化されるのは、ほんの一時でしかない。

ならば、天皇家が国家の税金徴収ユニットの基礎単位である家族と象徴的に相似関係にあることを見抜き、両者を相対化することも、この語り手にとっては容易なことに思える。だが、語り手にとって、天皇家だけではなく現実の家族も、相対化する存在ではなかった。むしろ、家族とくに母親の存在は、「痛み」や「痒み」と同じ位相

に存在していたのだ。

4 母親から娘へ あるいは 娘から母親へ

語り手にとって母は、自分に「安心してストレスを放つ」存在である。

要するに母は幻想の遊びのなかに浸っているわけだ。が、どこからか湧いてきてその幻想を造り出している、切実な不安は本物に思えた。

幻想の「遊び」に浸るのは母娘に共通した点なのかもしれない。だが、母の幻想世界はストレスの発散であり、そのストレスの原因を、語り手は自らの「ナニモシテナイ」に見出す。

だが、それは一方的な関係というわけではない。

だから自分が言えば母は聞いてくれるものなのだとばかり思い込んでいた。で文章にして二百字程訴えたあたりでため息が消え、母の笑い声が返って来た。わくわく動物ランドの最中なんだよ、とふいにいう母には私の湿疹は見えないのだった。結局番組が終わる頃おどおどした声で向こうから掛かってきたが、今度は私が冷酷にし、被害者と化してとげとげしく復讐した。

両者の間にあるのはある種の共依存関係であるとも言えるだろう。実際、語り手はTシャツ一枚購入しても母に報告していることを、何の違和感もなく表明している。だが、母は父と暮らしているし、多少なりとも社会との関係性も有している。母には湿疹の病は現れないし、娘の気持ちを理解することもない。

ナニモシテナイと決め付けられる私がなぜだか自分では気に入らないのだった。十年間ずっと私自身はナニカラシテキタつもりでいたのだった。だがしてきたはずの何かは自分の部屋の外に出た途端にナニモシテナイに摩り替わってしまった。

「ナニモシテナイ」自分は部屋の壁という境界を越えた途端に現れる。さらに、それは外部の他者によって与えられるものであり、直接的な（自己）認識と対立する点において、外的な与件と似ている。

……なんで吟味もせず私小説などという言葉を使うんだろう。なんでひらがなとカタカナの区別が付かないんだろう。現実の土地と、日本語で作った言葉の土地の区別をなぜしないのだろう……。

「ナニモシテナイ」という意識は、小説が出版されない、読まれない、評価されな

いという事実によって増幅される。「ナニモシテナイ」自分を描くことが「ナニカシテイル」ことになる逆説がこのテキストにあるとも言えるが、自分では「ナニカシテイル」という直観的な確信が、外部からの「ナニモシテナイ」という声に脅かされ続けるテキストでもある。

だが、やはり語り手を一番脅かす声は、母親のそれである。語り手はさんざん痛みや痒みに苦しめられたにも関わらず、病気が治癒した途端に、その原因とおぼしき母の元に帰郷する。だが、母親は娘の病状を心配するでもなく、自分の周囲への不満をだらだらと話し、そして自身が批判されれば、怒りの矛先を娘にむけてゆく。

娘が「ナニモシテナイ」という意識は、母親の娘への精神的依存の自覚を奪い、父親への不安・不満が母親から娘へ繋がってゆくという負の感情の連鎖に、父親も母親も気づくことはない。

この様に母娘の関係を読むことに比べ、意外と見逃されがちなのが、祖母との関係である。

祖母は七十五歳の時に私に和服を縫ってくれた。成人式も卒業後も親にさからって着物を着なかった（正確に言うと二浪していたので成人式はなかった）のだが、祖母を喜ばすためにそれだけは着た。が、その時、こーんなおばあさんがぬったんだからたいしたもんだよなあ、と言って袖を通すと、祖母は私は少女のようなのと言って怒り狂った。おまけに着物を着た私を見て、買ってやらないから着ないのだという態度を祖母が露にしたため（或いは周囲が祖母のはしゃぐざまを見て邪推したため）家庭争議となった。

実は、祖母は、語り手の和服への関心、とりわけその生地への関心が強いことの問題に関わっている。物語では語り手が生地に対して異様な拘りを持っている様に描かれているが、語り手本人がその「起源」を自覚することはない。

天皇陛下の着ている袖の色は茶色っぽい単色に見えただけだが、皇后陛下の方は精妙な色を重ねてあって綺麗だった。ただ、十四インチのテレビでは生地も重たげなだけで織り目は見えなかった。他のお雛様たちの十二単衣が、大体同じような色合わせなので、競う、という感じにならずどこかもの足りなくなり（といっても儀式の時にばらばらなのを着ていれば困るだろうが）いや、細かいところで差をつけてあってもテレビで見ているだけでは区別出来ないのが苛々した。

この生地への関心は、皇室行事のテレビと現実の間にあるノイズを生じさせるのだ。このノイズは、東京から伊勢へ移動するとともに、テレビと現実の位相が反転される形で再び問題となる。

さらに、下記のような祖母についての語りは、祖母と母との相同性を語ってしまっている。

祖母がガンで死ぬ時、高熱の手を握ったまだ若い婦長さんが同じように言った。外にだけ異様に愛想のいい祖母がその人だけは本当に良く思っていたらしい。と、いっても天性の詩人だった祖母に本心というものがあつたかどうかは、最後まで謎のままであつたけれど。

この「天性の詩人」という語彙をそのまま良い意味として受け取ることは難しい。祖母と母と語り手は、多くのノイズを含んだコミュニケーションによって繋がっているのだ。

5 病気からの快方 あるいは 遊びからの解放

妄想の積み重ねという「遊び」は、最後には、即自的な「植物」や無機物的な「妖精」を想像することにより心の安定を得る。むろん、これは「遊び」の勝利ではなく、「痛み」「痒み」の解消の時が、連休が進むにつれて、具体的な日付として見えてきたというのがあるだろう。

だが、行く医者を決めるためには、治療後に偶然会うなどの社会的関係が成立しないことや、待合室での会話、知人と会う可能性がないことなど多くの難題があつた。

こうした苦労の末、ようやく受診した結果は「接触性湿疹」というものであつた。想定もしなかつた病名に語り手は困惑しているが、この語り手の困惑は、「疱疹」と思い込んでいたものが「湿疹」であつたことだ。

「疱疹」とはウイルス等で出来る小水疱や小膿疱である。医学的な原因はウイルスによる外的なものであるが、当事者的には未知な原因より内的に発生した症状と感じ取っても不思議ではない。

だが、「湿疹」とくに「接触性湿疹」とは、病名からしても外的なものとの接触が原因である。この違いは、実は直接的な感覚与件と外的な与件との差に相当している。

様々な原因が重なっているように自分では思っていた。だがやはり直接は液体石鹼なのだろうか。でも私はナニモシテナイ事が根源的病なのではないかと疑い始めていた。

「ナニモシテナイ」自分とは、部屋の外部すなわち社会から与えられる評価である。湿疹の痛みや痒みは身体の内部から生じる直接的感覚与件であるが、それが原因で長期にわたって部屋の内部に閉じ込められる…。さらに、「接触性湿疹」も身体の外部的な刺激により皮膚に発症する。語り手にとってその痛みは、精神に及ぶほどの激痛であり、どんな手段を使っても当事者が相対化するものではなかつた。

この両者に共通しているのは、境界である「壁」や「皮膚」が無効化していることではない。ここで、無効化しているのは、内部と外部という意識そのものであることだ。

その意味において、接触性湿疹の原因となつた「接触」が、「ナニモシテナイ」ことなのではないか、という語り手の直観には、見逃すことが出来ない慧眼を含んでいる。

診察室から出て、薬を受け取るまでの一分程を腰掛けて待った。頭の中がぼんやりして気楽だった。他の患者が寄ってきてドウシタノデスカと尋ねてきた。そして「ソノホウタイハドウナッテイルンデスカ」。私は湿疹についてかぶれについてすらすらと答えた。

治療によって、「疱疹」は「湿疹」という症状に代わり、身体の異常として外在化され対象化された。それは、痛みとその原因、すなわち、内部と外部が二分化されたことを意味している。だからこそ、語り手は、自分の病状を「すらすら」と答えられるようになったのである。

治療の効果が始まった私は、夢に現れる親戚の娘の様子も、先日の大嘗祭の影響であると簡単に相対化してみせる。

皇室関係が今全部「……様」になっているのは、どういう事情なのか私は考え始めた。例えば故郷伊勢では内宮はナイクサンだ。外宮はゲクサン、またゲクサンだ。アメノウズメノミコトをオスメさんと呼ぶところもある。鮮かなタカミクラをふと思い出していた。

皇室関係の「様」という敬称の考察から、太古に大衆と天皇の区別がなかった時代への想像へと繋がる。こうした想像力は、意図せずにある種の政治性を含むものになる。様々な国家行事に現れる「万歳」という呼称をめぐる歴史的考察にも同様の側面があるだろう。

だが、一方で、母、祖母、(親戚の)娘と、語り手の想像力は、自身を含め、なぜ女性で連結されているのか。それら家族的な想像力が、なぜか天皇からの想像力と「接続」されていること。こうした問題に語り手は無自覚なのである。

病室である子どもとふれあった時の感覚も同様である。

自分の子供はとてもこんなに綺麗にしてやる事は出来ないだろう、と考えたあたりから、既に、私は架空世界に、母そっくりな鬱の作り出す幻に引っ掛かっていた。

母と自分の共依存関係をそうとは自覚できない故に、自己が想定できる人間関係も母と娘のそれしかない。また、母こそがこれまでの「ナニモシナイ」という与件を与える張本人であるのにもかかわらず、病状が快方にむかうにつれて、娘がいる母という自分を夢想してしまう。

ここで意識から消されているのは、「ナニモシナイ」の中に当然含まれる結婚しない、家族を作らないという要素である。また、当然ながら、なぜ「ナニカ」をしないのかという部分にも思考は及ばない。

でも私はまだ、どちらの色にするかさえ決めてもいない。ウサギをふたつにする
と両方のウサギに引き裂かれて、私は二重人格になってしまうだろうし。それば
かりか最近では選択がどんどん複雑になってきているのだった。

妄想の中で繰り返し語られるのは、決定できないという物語である。ただ「ナニモシテナイ」ことをすることは当然出来ない。「ナニモシテナイ」は、出来る可能性のあるあらゆることを選択しないで居続けた結果だからだ。

6 伊勢への帰郷 あるいは 反転する「移動」

病気が自覚されたのは両親の旅行とその後の生活のサポートのための帰郷後であったのだが、治療が一段落すると、語り手は同じ様な理由で伊勢に帰郷する。

治療が終わって二日後、伊勢に帰った。商用で父が五日程旅行し、母ひとりになるのが心配であったから。彼女が一人で居られるわけではないと、私は思っていたが、ただの思い込みに過ぎなかったのだろうか。

物語に繰り返される円環構造と語り手の思考。一見、客観的な語り手の行動や省察の中にどうしても踏み込めない(踏み込まない)部分があるというアイロニーを指摘することは容易であるが、もう少し詳細にこの帰郷を考えてみる。

本当に何があるのか知らなかった。一方、一ヵ月以上も前から伊勢では全路地をミニバトカーが走り回っており、日本で一番治安のいい土地というやつに変わっていると、聞いてはいた。だがそんな一ヵ月も前の事ではないか、という感覚がこっちにはあった。さらに自分の湿疹が一段落したため、他の事も全部終わってしまったという大変身勝手な錯覚を抱いてもいた。

この語り手の「移動」は、日本の治安維持が集中していた地域の移動と軌を一にしていた。もちろん、語り手にとっては、それらが偶然皇室に縁のある二つの地域のそばであったことに過ぎないのであるが、両者は皇室のある時代の終焉と次の時代の出発を象徴するものであり、その両者が昭和から平成へと変わった時代の国民の「気分」そのものであったと言える。しかし、そうした国民たちの一人として、語り手はそこに居ただけであるのか、と問われれば、どうもそうとは思いがたい。

即位の礼以降も、一二月二日・二三日が大嘗宮の儀、二四・二五日が大饗の儀、二七・二八日が即位礼及び大嘗祭後新宮に神謁の儀と行事は続いていた。だが治療中であった語り手には、このことを知る由はなかったのだろう。

車内で前日である一二月二五日の三島忌を思い出し、その連想から昔読んだ(かもしれない)小説を思い出し、松旭斎天勝に憧れ両性具有的な女性奇術師に扮装しようとする場面を思い出す。

この小説は三島由紀夫の「仮面の告白」だと思われるが、テキスト中ではそのことは示されては居ない。また、ここでの関心は、物語内容よりも、語り手の「懐中電灯」と「万年筆」への拘泥である。

ここで語られているのは、おそらく論理的ではない連想の中のある種の余剰の問題である。天皇(皇后)・三島由紀夫・家族(皇太子)という三者の間にある連想は、論理的にも理解しやすい。しかしながら、三島由紀夫の性は同性愛や女装といったノイズを発生させ、さらに「万年筆」への拘りは、精神分析的解釈では納得しがたい違和感を語り手に残している。

それにしても、なぜこのテキストの語り手は、過剰に自己分析的であるにもかかわらず、皇室と家族という回路をまるで避けるように、接続しようとはしないのか。そこには、語り手自身が、これもまた避けようとしている「性」の意識が関係しているのではないだろうか。

家族とは性があるいは性の結果が結びつけることによって有限の生を越えることを可能にしたユニットである。もちろん、広義に考えれば、性は家族の必須条件ではない。しかし、家族の中にある性の機能を無視することは、何かしらの隠蔽を前提にしているとも言える。また、皇室であっても(であれば尚更)それは同様である。

必要なのに隠蔽しなくてはならない。だが隠蔽することによって強固な結びつきは可能になる。

一九九〇年の時点では、まだ徳仁親王はご成婚されておらず、皇太子のうち宮家として機能していたのは、秋篠宮家のみである。

神謁の儀の時点において徳仁親王は夫婦という形態を有してはいなかったのである。ゆえに世のブームは紀子様との結婚報道に湧いており、この時の取材対象の中心も紛れもなく紀子様であった。

八王子を出た時は雨の降り始めで、宇治山田駅を出ると上がりかけていた。駅前ではただ、警官がぞろぞろと帰っていくところだけを見物した。

前天皇が永眠する場から天皇の「聖地」とも言える場所へ。東京の即位の礼から伊勢での一連の報告の儀へ。この移動は天皇家の「移動」そのものでもあった。

ここからは知った人と会うかもしれない、圏内であった。東京の学校に進んだ知り合いの話、を思い出した。帰郷の電車の中で町内の妻子持ちの教師から露骨な誘惑を受けたという。教え子ではないが、小学校の時に何回か近所であったのでその旨を告げた。相手は仰天して途中下車した。線路の繋がっているところでねえ、と笑ったのだが。

そして、「圏外」から「圏内」へ。この語彙そのものが携帯電話やポケットベルを連想させ、時代性を帯びているとも言えるが、語り手にとって「圏内」であることは土地や人に対して、名称あるいは象徴的機能を越えた「意味」を有していることを示し

ている。そして、そのことは伊勢という場所と皇室の間にあっても同様なのである。

で、あの人誰、知り合いだったかなあと、私は思った。同じ車両にどこかで見た人がいたから。それがどこなのかは判らないが「知っている」のだった。とても痩せたあまりにも頭の小さい人だ。

テレビ越しにみる「現場」からテレビを生み出している「現場」へ。現場の外部から現場の内部へ。この移動は、様々な象徴的な意味を纏いながら進んでゆく。

「知り合い」という言葉が、「圏内」すなわち地元であるという意味から、テレビ越しに一方的に知っているという意味へスライドしている。こうしたテレビ上の人物に対する既視感は、わりと一般的なそれではあるが、ここでは現場の中から見出した違和感として表出していることが興味深い。そもそも、現場との違いを知るために購入したテレビであったのに、テレビとの違いを現場から見出すという反転が生じているからだ。

私はというと、急に沿道の警備が気になり始めた。新幹線に乗っていた時はなんでもなかった事が、近鉄に移るやいなや強く意識された。自分がこの国の無力な小市民で、取り締まりの対象になっているのだと思い出したので。

近鉄電車ではこの反転に加え、警備する人間、報道の裏方の人間、地元の間をそれぞれ観察する視線になっている。いずれも、テレビ側からは決して観ることが出来ない様相だ。こうした相対する経験は、テレビと現実、あるいは内部と外部という二項対立をも無効にしている。

何度でも母親を怒らせてテレビゲームを止めさせ、ニュースを見た。昨夕確かめた紀子さんのスーツの緑色は、普通の灰色の中にほんの少し緑が入っているようにしか映ってなかった。それは実物とは違った地味な色で、しかも地下で見た時と胸元の飾りが違っていた。(中略)目の前で確認したのに、正しく見てなかった。

現実とテレビの相違から現実での経験が否定される。だが、これは現実への信頼の低下などではない。既に、現実とテレビの位相は容易に反転可能なものになっているのだ。

他にテレビを見て判った事、レポーターの名前は、武藤まき子という。昼のワイドショーでテロップが出た。(中略)前日見た、変わった織り方の生地がそのまま映っていたが、図鑑のアマガエルさえも負けそうな緑が、ほんの少し苔の色を浮かせたネズミ色に変わり果てて、アクセサリーもブラウン管越しでは目に留まり難い。なぜか厚みのある大柄な体格に見えた。血色が映えず、鼻だけが拡がり、目も潤んでなかった。一般人に見えた。

もちろん、布の印象など決してテレビでは伝わらないものへの拘りもある。しかし、テレビであるが故に伝わる情報もある。現実ではレポーターも芸能人なんだと思った印象が、テレビでは逆転している。やはり、ここで起こっているのは、両者の絶え間ない反転もしくはその境界の溶解といった現象なのだ。

電話を待つ間、絵の好きな母は父の似顔絵を書き始めた。それは彫りの深い気難しげな顔つきの痩せた男で、最初誰なのか私は気が付かなかった。が、実は「合成」なのだ。

こう考えると、実家でおこる様々な現象が同様のものであると気がついてくる。母の書く父の似顔絵は様々な時期の位相が混在する「合成」であったし、母の記録・伝達する電話番号や父の話は、常に父のそれとは一致しない。

だが、もはやこれらは、描写や伝達の失敗なのではない。「失敗」とは「成功」を前提とした状態評価であり、ここで描かれているのは、常に「成功」も「失敗」もないコミュニケーションの「常態」であり、そこでは「伝達」や「描写」とった言語のコンスタティブな側面への信頼性など微塵もない。

語り手は、コミュニケーションがもたらすパフォーマティブな側面に苦しみながらも、その側面に自己の世界を構築し苦しい現実と対峙しようとしているのだ。

7 円環する物語 あるいは 出口のないポストモダン

帰京時の新幹線、浜松を過ぎたあたりから見え始める富士山に対して、「図鑑」でみたような印象を覚え、「山というよりはプラモデル」に見える。

伊勢生まれの私には何度通っても富士は珍しく、それなのにどこか一点でしらけている。それは日本の象徴ではなく東方の異景だった。幕の内弁当とワンセットの富士。

こうした富士を「会社のマークの富士」「銭湯の富士」と呼ぶ語り手の意識は終始一貫している。語り手にとって、現実と表象の間に境界線はなく、そこにはオリジナルとコピーという関係もない。しかし、「富士」は日本を象徴するものの一つである。「天皇」の伊勢から「富士」の静岡へ、そして前天皇の眠る「八王子」へ。語り手の「移動」は循環している。

帰宅しても、両親とのコミュニケーションの確執は続く。

電話を切ってから状況を延々と邪推し続けた。最初にネクタイの柄を母に教えた時、それは正月の売れ残りに決まっている、と私に言った、父も見た瞬間そう思ったのではないかと。一見無地だが地紋に後ろ向きの羊がいて、上等のものだし生地

も良かった。未歳の父に丁度いいと思い定価で買ったのだが、面白いものというのはどうもいけないらしい。外国のブランドの方が良かったのか。還暦の祝いも、木造のアパートに住んでおいて、母から送ってきた引っ越し資金を全部封筒に入れて上げれば良かったのか。でもそれでは何か変だ。というか困る。

ここで問題になっているのも「生地」が原因となったディスコミュニケーションの問題である。その気分は父から母へ受け継がれ、再び語り手へ循環してゆく。テキストは断片的な回想を繰り返しているように見え、それらは互いに関連し結びつき合っている。

子供の頃服を汚してクリーニング代が掛かると叱られた事があった。偉そうに小遣いから出すと言いつつ、お前の小遣いは仮にお前に預けてあるだけで、そんなものは家の中の金が移動するだけだと、母から言われて沈黙した。その時の移動、という言葉が浮かんでいた。

「ネクタイ」の「生地」から「子供の頃」の「服」の記憶へと繋がる。「移動」という言葉。東京から伊勢へ「移動」。天皇の「移動」。両親から娘の言葉の「移動」。お金の移動。そして、テキストではこれらの「移動」は循環している。伊勢と東京、伊勢と八王子、娘と両親、永遠に繰り返される「移動」……。

文芸誌を部分的に読む読者でさえ三百人しかいないのではないかとその日の東京新聞文芸欄に書いてあった。刷り部数が数千で評論家と編集者と作家のごく一部だけが読むのだとも。タレントの小説とプロの作家の質は殆ど変わらないとも。その証拠として、辻仁成と尾崎豊、鈴木保奈美と鷺沢萌を比べていた。筆者はコミック雑誌の編集を経て、今は評論家にもなっているという、文芸書の比較的熱心な読者だと自称している人だ。本当は一万数千部出して、五、六割売れるらしいと聞いたのだが。

今から見れば、純文学の商品的価値観をめぐる大塚英志との論争¹⁷⁾の発端となった言説ではあり、物語上では妙な唐突感がある様にも見える。しかし、テキスト上では、最初から批評家や読者と作家の間にあるディスコミュニケーションを問題にしており、言い換えればそれは、書く人と読む人のコミュニケーションの問題である。そして、物語が自活出来ない純文学作家の物語である面を考えれば、書くことと働くこと（稼ぐこと）と両親との確執という三つの柱が物語を支えているとみることは容易であり、これらの想像力も互いに結びつき合っている。

その二日後の夕方、もとのヒヨドリだけ戻ってきて急にアオジのような鳴き方をした。柿を出そうにも私の目はモノモライで固まっており、痛みで起きられなかった。気が付くと急に可愛くなっていたのだ。他のヒヨドリが死んだりし

でも通り一遍にも感じないはずで、自分のヒヨドリだけが可愛く他のはどうでも良かった。だが鳥の特徴は体格と羽の乱れくらいで、半月会わなければまったく判らなくなってしまう。

これもまた最後に突然語られる、ヒヨドリとのエピソードである。語り手はあるヒヨドリへの愛情を自覚しながらも、それが偶然かつ恣意的な選択によるものであり、記号的な選択に過ぎないという自覚も有している。最初に来た鳥がツグミや別のヒヨドリであったら、そちらが愛情の対象になっていたことだろう。ヒヨドリは偶然のテリトリーを、偶々与えられた柿を当然の権利の様に守る。そしてそのために他者と戦い傷つけ、己も傷つく。この戦いに正義も悪もなく、両者の関係は対等であり容易に反転可能なそれである。

にもかかわらず、語り手はある特定のヒヨドリたちに愛憎の念を抱くのである。家族とは何か。愛情とは何か。憎しみとは何か。コミュニケーションとは何か。それは本質的には不可能性に満ちた行為なのではないか。表象とは現実のコピーなのか。表象こそが我々の現実なのではないか。いわゆるポストモダンのな諸問題がテキストの至る処に散乱し、それらは様々な「移動」と共に明滅している。

注

- 1) 山崎眞紀子「笙野頼子 年譜」『現代女性作家読本④ 笙野頼子』清水良典編、鼎書房、二〇〇六（平成一八）年二月
- 2) 川村二郎「解説」『なにもしてない』講談社文庫、一九九五（平成七）年一月
- 3) 山内由紀夫「河野多恵子の表現世界—戦後身体論として」『群像』二〇〇一（平成一三）年一月
- 4) 清水良典「「ない」ものたちの最終戦争 笙野頼子は何と戦っているのか?」『現代思想』二〇〇七（平成一九）年五月
- 5) 山下真史「「なにもしてない」—〈現実〉の不確かさの感覚—」『現代女性作家読本④ 笙野頼子』清水良典編、鼎書房、二〇〇六（平成一八）年二月
- 6) 中川成美「SF 的想像力と文学—笙野頼子の冒険—」『論究日本文学』平成二五（二〇一三）年一月
- 7) 鈴木健『なめらかな社会とその敵』勁草書房、二〇一三（平成二五）年一月
- 8) ヘルマン・シュミツ『身体と感情の現象学』産業図書、一九八六（昭和六一）年九月
- 9) 清岡卓行『手の変幻』講談社文藝文庫、一九九〇（平成二）年九月（初出は一九六六（昭和四一）年）
- 10) C・ベンティーン『皮膚』法政大学出版局、二〇一四（平成二六）年五月
- 11) 高山龍太郎「「ひきこもり」は昔からあった?」『「ひきこもり」への社会学的アプローチ—メディ・当事者・支援活動』ミネルヴァ書房、二〇〇八（平成二〇）年一月
- 12) 高山龍太郎「不登校から「ひきこもり」へ」前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』所収
- 13) 萩野達史「「ひきこもり」は男性に多い?」前掲『「ひきこもり」への社会学的アプローチ』所収
- 14) 塩倉裕『引きこもり』ビレッジセンター出版局、二〇〇〇（平成一二）年一月
- 15) 清水良典「解説 漂流する異分子の精神」『笙野頼子三冠小説集』河出書房新社、平成一九（二〇〇七）年一月
- 16) 統計データの出典は『日録20世紀』（講談社、一九九八（平成一〇）年五月一日・一九九日合併号）及び『週刊20世紀』（朝日新聞社、二〇〇〇（平成一二）年一月一日）。
- 17) 笙野頼子「ドン・キホーテの侃侃譁譁」『群像』二〇〇二（平成一四）年五月